

---

## 原 著

---

# 保健師が捉える乳幼児をもつ母親の育児に関する ヘルスリテラシーの現状

多田 美由貴<sup>1)</sup>, 岡 久 玲 子<sup>1)</sup>, 松 下 恭 子<sup>1)</sup>,  
岩 本 里 織<sup>2)</sup>, 上白川 沙 織<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>徳島大学

<sup>2)</sup>神戸市看護大学

**抄 録** 目的：保健師が乳幼児をもつ母親の育児に関するヘルスリテラシーの現状をどのように捉えているかを明らかにすることを目的とした。

方法：A県の地域特性が異なる2市3町で働く母子保健業務経験年数3年以上の保健師5人を研究参加者とした。2018年3月～4月に半構成的面接調査を実施した。調査内容は、最近の母親の育児に関するヘルスリテラシーの現状をどのように捉えているか、それは子どもの健康にどのように結びついているか、育児情報を提供するにあたって上記のことを考慮して提供しているか等であり、質的帰納的に分析した。倫理的配慮として、研究参加者には、研究目的等を口頭および文書で説明し、同意書に署名を得た。本研究は、所属大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

結果：保健師が捉える乳幼児をもつ母親の育児に関するヘルスリテラシーの現状として、【身近な育児情報源へのアクセス】、【コミュニケーション不足による育児情報の不十分な理解】、【自己の価値観による育児情報の選択】、【子どもの状況よりもマニュアル優先】、【信頼できる育児情報の見極め】、【溢れる育児情報に翻弄される子育て】の6つのカテゴリ、16のサブカテゴリ、36のコードが抽出された。

考察：保健師は、情報が溢れかえる中で育児をしている母親に対して、保健師等の専門職をはじめ信頼できる情報源から上手く情報を活用できるよう教育の必要性を感じていた。また、今後ますます情報化が進展し、新型コロナウイルスのように新たな感染症が出現してオンライン支援が主となってくる中、母親の育児に関するヘルスリテラシーを高める支援の重要性が示唆された。

キーワード：ヘルスリテラシー、保健師、母親、乳幼児、育児情報

## I. 緒言

胎児期から乳幼児期は、心身の発生と発達が最もダイナミックに行われる時期である一方、自分がおかれた環境を変えたり、健康行動を選択したりすることができないため、まわりの大人が十分に配慮しなければならない時期といわれている<sup>1)</sup>。平成28年社会生活基本調査<sup>2)</sup>に

よると、日本の母親の育児・家事関連時間は、父親の3倍以上であることから、この時期の子どもの健康は概ね母親に委ねられている。しかし、乳幼児と触れ合ったことがない中高校生の割合は高く<sup>3)</sup>、子どもを産むまで育児に携わったことがない母親は少なくない。そのため、育児に関して経験から得られる知識や技術は、以前と比較して少ないことが予測される。

従来、育児に関する情報は、主として親や友人等、身近な育児経験者から得ていたが、現在は情報通信技術の発展により、インターネットを利用することで時間や場所を問うことなく、いつでもさまざまな育児情報を得ら

---

2023年3月2日受付

2023年8月3日受理

別刷請求先：多田美由貴，〒770-8509 徳島県徳島市蔵本町3丁目18-15 徳島大学医歯薬学学部地域看護学分野

れるようになった。井田ら<sup>4,5)</sup>は、乳幼児をもつ母親のソーシャルメディアの利用実態やそこでの育児情報ニーズについて調査しており、ソーシャルメディアが新たなコミュニティとしての機能を果たしていること、母親は同月齢の児をもつ母親の経験談を求めていることを明らかにしている。しかし、インターネット情報の信頼性に関する判断は、母親自身に任されており、情報に翻弄されるリスクが大きいことが報告されている<sup>6)</sup>。また、保健師・助産師を対象とした調査では、現代の育児情報のあり方は、情報を取得しやすい面もあるが、情報過多による混乱を招くという面もあり、初産婦の育てにくさの背景要因の1つになっていることが報告されている<sup>7)</sup>。

2017年には、生後6ヶ月の児に対して、はちみつ入りの離乳食を与えたことによる、乳児ボツリヌス症での死亡事例が発生した<sup>8)</sup>。これは、インターネットの料理サイトに、はちみつ入りの離乳食が複数掲載されていたことが発端だった。このことから、誤った情報は子どもの健康を脅かす危険性があることも明らかになった。

このように、多様かつ膨大な情報の中から自身が必要とする信頼できる情報を入手することは難しく、情報格差による健康格差の広がり懸念されている。そこで、健康や医療に関する情報を入手、理解、評価、活用して健康に結びつくよりよい意思決定ができる力であるヘルスリテラシーが健康を決める力<sup>9)</sup>として注目されている。

ヘルスリテラシーは、社会経済的状態と関連が深い<sup>10)</sup>ことから、一定の社会保障が確保され、識字率が高い日本人のヘルスリテラシーは高いものと思われていた。しかし、日本の成人を対象にした調査では、EUの8か国（オーストリア、ブルガリア、ドイツ、ギリシャ、アイランド、オランダ、ポーランド、スペイン）と比較して低いことが明らかにされている<sup>11)</sup>。また、これまで、母親のヘルスリテラシーに関する研究は、米国が中心で調査対象も肥満や疾患をもつ子どもの母親や社会経済的に制限のある母親等限定的であった<sup>12)</sup>。

情報化社会である現代において、母親のヘルスリテラシーの向上は、母子保健の喫緊の課題である。家庭訪問や乳幼児健診等を通して、妊娠期から継続して母子と関わる保健師は、すべての子どもが心身ともに健やかに成長することのできる地域社会の形成のために、母親のヘルスリテラシーの向上への支援を行う重要な役割をもつといえる。さらに、ヘルスリテラシーは、利用者側のみではなく、対象のヘルスリテラシーに合わせた情報を提供する側とのコミュニケーションの重要性が示されてい

る<sup>13)</sup>。そのため、保健師側の一方的な保健指導ではなく、母親との相互のコミュニケーションを通じた理解のなかで支援する必要がある。しかし、現在、保健師が母親の育児に関するヘルスリテラシーをどのように捉え、支援しているかを明らかにした研究はまだなされていない。

以上より、本研究の目的は、保健師が乳幼児をもつ母親の育児に関するヘルスリテラシーの現状をどのように捉えているかを明らかにすることとした。本研究成果は、今後、ヘルスリテラシー向上を支援する保健指導プログラム構築の基礎資料とする。

## II. 研究方法

### 1. 操作的用語の定義

ヘルスリテラシーとは、健康や医療に関する情報を入手し、理解し、評価し、活用（情報を使うことでより健康に結びつくような、よりよい意思決定を行うこと）する力と定義した。

育児情報とは、子どもを心身ともに健やかに育てるために必要な情報であり、養育者との愛着形成を促すために必要な情報と定義した。

### 2. 研究参加者

研究参加者は、A県で母子保健を担当している市町村保健師である。研究参加者の選定にあたり、5市町の協力を得た。所属長に研究協力依頼を口頭および文書で行い、承諾を得た後、候補者の推薦を受けた。候補者の推薦基準は、母子保健業務経験年数3年以上の保健師とした。経験年数1～3年目は、新任期保健師と分類される<sup>14)</sup>ことから、本研究では、自立して保健師活動を実施している3年目以降を基準とした。候補者には口頭および文書で研究協力依頼を行い、本研究への同意が得られた2市3町の保健師5名を研究参加者とした。

### 3. 調査方法

2018年3月～4月にインタビューガイドを用いた半構成的面接調査法により行った。調査は、個別に研究参加者の希望する日時に合わせ個室で行った。調査は研究者1名で行い、調査回数は1回、60分以内とした。インタビューガイドの内容は、最近の母親の育児に関するヘルスリテラシー（育児情報の入手、理解、評価、活用）の現状をどのように捉えているか、それは子どもの健康にどのように結びついているか、育児情報を提供するにあ

たって上記のことを考慮して提供しているか等であった。面接内容は、研究参加者の同意を得てICレコーダーに録音した。録音できない場合は、メモをとった。

#### 4. 分析方法

ICレコーダーに録音した記録およびメモをもとに逐語録を作成した。ヘルスリテラシーの定義をもとに、保健師が母親の育児に関するヘルスリテラシーの現状をどのように捉えているか表した部分を、意味の読み取れる範囲で抽出して語りの内容や言葉に忠実にコード化した。次にコードの意味に留意してサブカテゴリ化、カテゴリ化を行った。分析にあたり、地域看護学を専門とし、質的研究の実績がある教育研究者3名によるスーパーバイズを受けて進めた。

#### 5. 倫理的配慮

研究参加者には、研究目的、研究参加および中断の自由、匿名性の確保について口頭および文書にて説明し、同意書に署名を得た。本研究は、徳島大学病院医学系研究倫理審査委員会の承認（2018年3月26日承認2747-1）を得て実施した。

### Ⅲ. 研究結果

#### 1. 研究参加者の概要（表1）

研究参加者5人の平均保健師経験年数（standard deviation, SD）は、16.4（4.43）年、平均母子保健業務経験年数（SD）は、11.4（4.76）年であった。

なお、インタビュー時間は、平均47.6分（45分～52分）であった。

#### 2. 保健師が捉える乳幼児をもつ母親の育児に関するヘルスリテラシーの現状（表2）

研究参加者の語りから、6つのカテゴリ、16のサブカ

表1 研究参加者の概要

No.	年代	所属	保健師経験年数	母子保健経験年数
1	20代	町	4年	4年
2	30代	町	11年	5年
3	30代	市	14年	3年
4	50代	市	26年	18年
5	50代	町	27年	27年

テゴリ、36のコードが抽出された。以下、カテゴリを【 】, サブカテゴリを< >, 具体的な語りを「 」で示す。

#### 1) 【身近な育児情報源へのアクセス】

このカテゴリでは、4つのサブカテゴリと10のコードが抽出された。保健師は、母親の育児情報源として、「本当にスマートフォンというか、インターネットの情報をすぐく見ているだろうなということを感じる」と<インターネットを利用して育児情報を検索している>こと、「身近な人、自分のお母さんだったり、ちょっと大きくなってくると、お友達に聞いたりとか」と<身近な育児経験者や母親同士のつながりから育児情報を得ている>現状があることを捉えていた。

一方で、「行政からの情報は受け取ってないような気がしますね。そんなの知らなかったっていうような」と<行政が発信している育児情報を十分に得られていない>、また、保健師は、困ったときは相談して欲しいと思っているが、実際には、「保健センターに相談に来たり、関わったりということ自体、敷居が高いと感じている方もいる」と<育児相談の相手として専門職に積極的にアクセスしていない>現状があることも捉えていた。

#### 2) 【コミュニケーション不足による育児情報の不十分な理解】

このカテゴリでは、3つのサブカテゴリと6つのコードが抽出された。保健師は、入手した育児情報をもとに育児相談の場に行けたとしても、「以前だったら相談をピタッと直球で相談してそれで終わりだったことが、そこまで行きつかなくて」と<相談したい内容を上手く言葉にできない>ことで、不完全燃焼となっている母親が少なからずいる現状を捉えていた。

また、育児相談や情報提供の場面において、「出生届けのときに話した内容でも、あっ、そんなのあるのですか」と<以前に説明した育児情報であっても新鮮な反応をみせる>、「一昔前だったら話をしているけど何か伝わっていき感じがあったが、今は頷いてくれるけどわかっているのか、わかっていないのか（が伝わってこない）」と<説明していてもわかっているのかいないのかわからない反応をみせる>ことから、内容を十分に理解できていない母親も少なからずいる現状を捉えていた。

#### 3) 【自己の価値観による育児情報の選択】

このカテゴリでは、3つのサブカテゴリと7つのコードが抽出された。保健師は、母親と話をする中で、「こう書いているからこうするっていうのを決めていて、意見はあまり聞き入れてくれない方もいる」と<自分が信

表2 保健師が捉える乳幼児をもつ母親の育児に関するヘルスリテラシーの現状

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
身近な育児情報源へのアクセス	インターネットを利用して育児情報を検索している	インターネットの育児情報をみている
	身近な育児経験者や母親同士のつながりから育児情報を得ている	自分の母親から育児情報を得ている
		育児経験のある友達から育児情報を得ている
		母親同士のつながりから育児情報を得ている
	行政が発信している育児情報を十分に得られていない	行政が発信している育児情報と母親が得ている育児情報にずれがある
		行政が発信している育児情報が本当に届けたい人に届いていない
育児相談の相手として専門職に積極的にアクセスしていない	行政が発信している育児情報を十分に受け取れていない	
	専門職に関わること自体敷居が高いと感じている	
	こまめに相談の機会を設けないと母親は専門職に相談しにくくなる	
コミュニケーション不足による育児情報の不十分な理解	相談したい内容を上手く言葉にできない	困ったときに気軽に相談できる専門職とのつながりが少なくなっている
		相談が直球ではないため相談内容を理解するまでに時間がかかる
	以前に説明した育児情報であっても新鮮な反応をみせる	素直に相談できずお互いが気を使いながら話をしている
		以前に提供していた育児情報でも新鮮な反応をみせることがある
自己の価値観による育児情報の選択	自分が信頼している育児情報と異なる情報は受け入れがたい	伝えつもりでも次に確認すると伝わっていない反応をみせることがある
		説明すると頷いてくれるが理解できていない
	自分の意に沿わない助言は受け入れがたい	「わかりました」と返事はしてくれるが母親の理解度が伝わってこない
		インターネットではこう書いてあったからと母親と意見が食い違う時がある
子どもの状況よりもマニュアル優先	インターネットではこう書いてあったからと意見を聞き入れてくれない母親もいる	
	専門職が助言しても母親の意に沿うものでなければ受け入れられない	
	自分の都合のいいように育児情報を選択する人もいる	
信頼できる育児情報の見極め	自分は選択できていると思っているがそうでもないことに気づいていない	
	祖父母世代の子育ての知恵は遮断しがち	祖父母世代の経験談は古い情報と思っている
溢れる育児情報に翻弄される子育て	取捨選択する力がないため祖父母世代の言葉をカットする	
	マニュアルを探して答えがない子育てに向き合っている	マニュアルを探して答えがない子育てに向き合っている
信頼できる育児情報を見極めている	子どもの成長発達よりもマニュアルを優先している	最近の母親たちはマニュアル世代である
	複数の情報源を利用して信頼できる育児情報を見極めている	普段の子どもの状況に合った情報よりも育児書どおりを優先する
信頼できる育児情報源を選択している	子どもの成長発達に合ったものではなく月齢を優先する	
	子育て経験者や専門職から聞いた育児情報を整理している	子育て経験者や専門職から聞いた育児情報を整理している
誤った情報活用で本来ない育児不安をつくり出している	インターネットから得た育児情報を専門職に確認している	
	信頼できるサイトから育児情報を得ている	
	専門職に聞く準備をしてから相談に来ている	
溢れる育児情報をコントロールできず精神的に振り回されている	障がいに関する情報をみて自分の子どもに当てはめて心配する	
	病気に関する情報をみて自分の子どもに当てはめて心配する	
	育児情報の流行に振り回されて不安になる	
	ありすぎる育児情報をコントロールできず何が心配か何が不安かがわからない	
	入手した育児情報を処理できずしんどくなっている	

頼している育児情報と異なる情報は受け入れがたい」方や、「今、それではないなという情報を言われる方も中にはいるのかなど、違う方を選択していたり、自分に

都合がいい方を選択していたり（する）」と「自分の意に沿わない助言は受け入れがたい」方がいる現状を捉えていた。

また、それは専門職に対してだけでなく、「昔の育児が変わってきている部分もあるがそのベースは変わらない。しかし、取捨選択する力がないために、おばあちゃん世代の言葉をすべてカットしている」と《祖父母世代の子育ての知恵は遮断しがち》で、母親が祖父母世代の経験談は、すべて古い情報であると認識している現状があることを捉えていた。

#### 4) 【子どもの状況よりもマニュアル優先】

このカテゴリでは、2つのサブカテゴリと4つのコードが抽出された。保健師は、「(育児の)マニュアルを探し、でもマニュアルもいろいろなことがあり、答えがない子育てに向き合っている」と《マニュアルを探して答えがない子育てに向き合っている》ことから、これが育児の正解という答えを求めている母親が多い現状があることを捉えていた。そして、マニュアル通りにしないといけないという思いから、「もう何か月だからこれをしないといけない」と、その子の状況に合わないものを選んでいく」と《子どもの成長発達よりもマニュアルを優先している》ことで、正解のない育児に向き合っている現状があることを捉えていた。

#### 5) 【信頼できる育児情報の見極め】

このカテゴリでは、2つのサブカテゴリと4つのコードが抽出された。保健師は、「今まで(育児)経験のある人とか、私たち専門職などから聞いて、整理をしているという声はあった」と《複数の情報源を利用して信頼できる育児情報を見極めている》こと、「いろいろな情報があるため、根拠のある情報を掲載しているサイトで取得して、がんばっているお母さんもいる」と《信頼できる育児情報源を選択している》ことから、育児情報の信頼性を評価している現状があることを捉えていた。

#### 6) 【溢れる育児情報に翻弄される子育て】

このカテゴリでは、2つのサブカテゴリと5つのコードが抽出された。保健師は、入手した育児情報を上手く活用できないために、「このような症状があったら発達障害とインターネットでは書いているけれど、うちの子は違いますか」と《誤った情報活用で本来ない育児不安をつくり出している》ことや、「(情報がありすぎて)何が心配で何が不安かわからないけれど、不安だというお母さんが増えているように感じる」と《溢れる育児情報をコントロールできず精神的に振り回されている》ことから、育児情報に翻弄されている母親が増えている現状があることを捉えていた。

## IV. 考察

### 1. 保健師が捉える乳幼児をもつ母親の育児に関するヘルスリテラシーの現状について

保健師は、母親の育児情報源として、インターネットや育児経験者等、【身近な育児情報源へのアクセス】が主となっていると捉えていた。実際に、育児情報の入手にインターネットを利用している母親は9割以上、そのうちSNSを利用している母親は7割以上いることが報告されている<sup>15)</sup>。インターネットは、時間や場所を選ばず、知りたいときにすぐに情報が得られるため、母親にとって便利な育児情報源である。しかし、インターネット上をはじめとする育児情報には、根拠のない情報や営利目的のために操作された情報があり、必ずしも信頼できる情報ばかりではないことを母親に伝えていく必要がある。

根拠のある情報を発信している情報源の代表と言えば、国や都道府県等の行政である。しかし、保健師は、それらの情報源を母親は十分に得られていないと捉えていた。これには、行政の情報発信方法が関係していることが考えられる。全体への情報発信は、SNS等さまざまな方法で実施されているが、個人へは未だに文書が主であり、インターネットを主としている母親との間でズレが生じていることが考えられる。細坂ら<sup>16)</sup>は、専門職が的確な情報提供をSNSで行っていくことで、母親自身にとって有用な情報を取捨選択できる能力を高めることにつながる」と述べている。今後は、SNSで有用な情報を発信するだけでなく、母親と専門職のやりとりができる双方向のコミュニケーションツールとして利用できる形を探っていく必要がある。

また、保健師等の専門職は、行政への所属の有無に関係なく、根拠のある情報を発信している育児情報源である。しかし、保健師は、行政同様に積極的に活用されていない現状があると捉えていた。先のインターネットも関係していることが考えられるが、普段から専門職と関わる機会が少ないために、【コミュニケーション不足による育児情報の不十分な理解】となり、専門職への相談が母親の問題解決につながっていない可能性も考えられる。

子ども虐待のリスク因子でもある育児不安や育児困難感<sup>17)</sup>は、育児について気軽に相談できる人の存在、つまり情緒的サポートにより軽減されることが報告されている<sup>17,18)</sup>。とくに乳児期前期の子どもをもつ母親は、産後間もなく育児不安が高くなる時期であり<sup>19)</sup>、定額前で外

出機会が制限されて他の母親とつながる機会が少ないこともあり、保健師への育児相談希望の割合が高いことが報告されている<sup>4,20)</sup>。しかし、生後4か月児をもつ母親へのインタビュー調査<sup>21)</sup>では、専門家に教えて欲しいという思いを抱きつつ、ベースにある自分の考えや思いと異なるアドバイスを受けたときに抱く不安や、こんなことを聞いたら笑われるのではないかという戸惑いを抱えていることが明らかになった。また、松本ら<sup>22)</sup>は、同様の傾向が1歳児をもつ母親でもみられ、全体の約7割が専門職にほとんどもしくは相談していなかったこと、相談場所を知らなかった母親も約1割いたことを明らかにしている。

これらのことから、母親が気軽に専門職に相談できる機会の創出、および母親のニーズやリスクを見つけ出す専門職の面談技術力の向上が必要と考える。

前者については、2017年に母子保健法が改正され、妊娠期から子育て期にわたる切れ目のない支援を提供する、子育て世代包括支援センターが全国展開された<sup>23)</sup>。実際にそこで従事する看護職へのインタビュー調査では、支援のものが減り、妊娠期から育児期までの支援がつながり始めた、母親の育児行動に変化が見られた、活動が受け入れられていると感じたと活動の成果を実感していた<sup>24)</sup>。しかし、まだ設置されていない市町村もあり、組織体制や看護職の対応力等の課題も挙げられている。

後者については、専門職と母親との関係性が重要となってくる。光井ら<sup>25)</sup>は、母親と保健師の信頼関係は、子育て中の母親が安心感を得ることで、さまざまなサポートを積極的に受けしていくことを可能にするために必要な関係と述べている。信頼関係が築けていない状態では、母親を理解できずに一方的な援助となってしまう。また、身近な家族よりも専門職には、より高度で専門的なアドバイスや指導が求められていることから、十分に満たされなかった場合は満足度も低く、育児不安の強さにつながる可能性もある<sup>18)</sup>。そのため、母親と信頼関係を築き、専門的な知識をもとに相手に寄り添う面談技術を高めていく必要がある。そうすることで、相談することへの壁を取り除き、支援が必要な状況であるにも関わらず、支援につながらない母親を減らすことが期待できる。

もちろん、行政や専門職以外にも根拠のある情報を発信している情報源はある。保健師は、母親が【信頼できる育児情報の見極め】により、育児情報を評価している一方で、【自己の価値観による育児情報の選択】や【子

どもの状況よりもマニュアル優先】で自身の育児に取り入れようとしていることから、【溢れる育児情報に翻弄される子育て】になってしまっている母親が増えている現状があることを捉えていた。これらは、育児情報の評価基準を知らないためにできていない場合と、母親自身はできているつもりであっても実際にはできていない場合があり、先行研究<sup>15)</sup>においても指摘されていた。そのため、保健師は、評価基準を知らない母親に対して教育していくことはもちろん、できているつもりの方に対して教育していくことも重要である。

しかし、現在、母親の育児に関するヘルスリテラシーを客観的に評価し、それを踏まえた保健指導は実施されていない。また、保健師等の専門職による出産後の支援は、全戸訪問以降はハイリスク家庭に重点が置かれている。そのため、ハイリスクではないが【溢れる育児情報に翻弄される子育て】のために、「どうすればよいかわからない」、「ちょっとしんどい」と感じている母親は多くいると考える。今後ますます情報化が進展し、また、新型コロナウイルスのように新たな感染症が出現してオンライン支援が主となってくる中、母親の育児に関するヘルスリテラシーを高める支援が必要であると考えられる。これは、母親と子ども双方そして次世代の健康づくりにつながることが期待できる。

## 2. 本研究の限界と今後の課題

本研究の対象者には、母子保健業務3年の保健師もいた。母親の特徴を3年で捉えることは困難との見方もあるが、今回、主担当でなくとも母子保健に携わっていたことから、実情は把握していると考えられる。

今回は、高齢化率が高い山間部や沿岸部の地域から子育て世帯が多い地域まで、地域特性が異なる地域の保健師を対象に調査した。今後はA県だけでなく、対象者をより広げて調査を重ねることで、エビデンスのさらなる蓄積が求められる。

## V. 結語

保健師が捉える乳幼児をもつ母親の育児に関するヘルスリテラシーの現状について分析した結果、【身近な育児情報源へのアクセス】、【コミュニケーション不足による育児情報の不十分な理解】、【自己の価値観による育児情報の選択】、【子どもの状況よりもマニュアル優先】、【信頼できる育児情報の見極め】、【溢れる育児情報に翻弄さ

れる子育て】の6つのカテゴリが抽出された。

今後、ますます情報化が進展していく中で、母親の育児に関するヘルスリテラシーを高める支援は必要であると考えられる。

### 謝辞

お忙しい中、調査にご協力いただきました保健師のみなさまに、心より感謝申し上げます。

なお、本研究は平成28年度科学研究費補助金若手研究(B) 課題番号16K20856の助成を受けて実施した。

本研究に開示すべきCOI状態はない。

### 文献

- 1) 近藤尚己：健康格差対策の進め方 効果をもたらす5つの視点, 135, 医学書院, 東京, 2016.
- 2) 総務省：平成28年社会生活基本調査の結果, 2017 <http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/kekka.html> (検索日：2022年9月9日).
- 3) 内閣府：平成29年版少子化社会対策白書概要版, 2018 <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2017/29pdfgaiyoh/pdf/sl1-1.pdf> (検索日：2022年9月9日).
- 4) 井田歩美, 猪下光：1歳未満の児をもつ母親のソーシャルメディア上における育児に関する発言の実態 延べ34万件の分析, ヒューマンケア研究学会誌, 5(2), 7-13, 2014.
- 5) 井田歩美, 猪下光：2, 3歳児をもつ母親の育児情報ニーズ ソーシャルメディアにおける発言の分析, ヒューマンケア研究学会誌, 8(1), 71-77, 2016.
- 6) 澤田雅子：スマホ世代に向けた育児情報の伝え方, 月刊母子保健, 679(11), 1-3, 2015.
- 7) 岩谷久美子, 清輔裕子, 森寛子：保健師・助産師が感じる初産婦の「育てにくさ」の背景要因 乳児家庭全戸訪問事業における体験から, 母性衛生, 56(2), 383-390, 2015.
- 8) 厚生労働省：蜂蜜を原因とする乳児ボツリヌス症による死亡事案について, 2017 <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11130500-Shokuhinanzendu/0000161263.pdf> (検索日：2022年9月9日).
- 9) 中山和弘：ヘルスリテラシーとは, 福田洋・江口泰正編著, ヘルスリテラシー 健康教育の新しいキーワード, 4-6, 大修館書店, 東京, 2016.
- 10) Berkman ND, Sheridan SL, Donahue KE, et al. : Health Literacy Interventions and Outcomes : an Updated Systematic Review, Evidence Reports/Technology Assessments, 199, 1-941, 2011.
- 11) Nakayama K, Osaka W, Togari T, et al. : Comprehensive health literacy in Japan is lower than in Europe : a validated Japanese-language assessment of health literacy, BMC Public Health, 15, 505, 2015. doi : 10.1186/s12889-015-1835-x
- 12) 多田美由貴, 岩本里織, 岡久玲子, 他：母親のヘルスリテラシーを測定している尺度と関連要因に関する文献検討, The Journal of Nursing Investigation, 16(1, 2), 1-9, 2019.
- 13) Weiss BD : Health Literacy and Patient Safety : Help Patients Understand. Manual for Clinicians. 2nd ed. American Medical Association Foundation, Chicago, 2007 <https://www.ufjf.br/getmedicina/files/2015/11/BARRY-WEISS.pdf> (検索日：2023年5月1日).
- 14) 全国保健師長会徳島県支部：平成27年度全国保健師長会調査研究事業 看護の実践現場と教育との協働で創り出すシームレスな人材育成システムの構築報告書, 2016 [http://www.nacphn.jp/03/pdf/2015\\_umeda.pdf](http://www.nacphn.jp/03/pdf/2015_umeda.pdf) (検索日：2023年5月1日).
- 15) 中島千英子, 永井由美子：母親の育児情報源としてのSNS利用に関する調査, 大阪教育大学紀要, 68, 41-49, 2020.
- 16) 細坂泰子, 茅島江子：乳幼児を養育する母親のしつけと虐待の境界の様相, 日本看護科学会誌, 37, 1-9, 2017.
- 17) 申沙羅, 山田和子, 森岡郁晴：生後2～3か月児がいる母親の育児困難感とその関連要因, 日本看護研究学会雑誌, 38(5), 33-40, 2015.
- 18) 山崎さやか, 篠原亮次, 秋山有佳, 他：乳幼児を持つ母親の育児不安と日常の育児相談相手との関連 健やか親子21最終評価の全国調査より, 日本公衆衛生雑誌, 65(7), 334-346, 2018.
- 19) 大賀明子, 山口由子, 皆川恵美子, 他：褥婦の不安

- 変動 STAI を尺度とした不安水準の分娩1ヵ月までの追跡, 日本助産学会誌, 10 (1), 46-55, 1996.
- 20) 野川瞳, 小林恵子, 八尾坂志保: 乳児の母親が育児相談において保健師に相談したい内容と背景要因, 新潟大学保健学雑誌, 17 (1), 27-33, 2020.
- 21) 横山文子, 今関節子, 新野由子: 4ヵ月児を育児している母親の育児体験 はじめてのわが子の健康管理に焦点をあてて, 看護学研究紀要, 5 (1), 1-14, 2017.
- 22) 松本憲子, 壹岐さより: 1歳児を育てる母親の育児力に関する実態調査, 宮崎県立看護大学看護研究・研修センター事業年報, 4, 11-25, 2015.
- 23) 厚生労働省: 子育て世代包括支援センター業務ガイドライン, 2017  
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/kosodatesedaigaidorain.pdf> (検索日: 2022年9月9日).
- 24) 槻木直子, 岩國亜紀子, 川下菜穂子, 他: 子育て世代包括支援センターで活動する看護職が提供している妊娠期からの切れ目ない子育て支援, 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要, 26, 41-59, 2019.
- 25) 光井朱美, 星野明子: 母親と保健師の信頼関係の概念分析, 京都府立医科大学看護学科紀要, 28, 1-5, 2018.



## *Health literacy of mothers with infants as perceived by public health nurses*

Miyuki Tada<sup>1)</sup>, Reiko Okahisa<sup>1)</sup>, Yasuko Matsushita<sup>1)</sup>, Saori Iwamoto<sup>2)</sup>, and Saori Kamishirakawa<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> Department of Community Health Nursing, Tokushima University, Tokushima, Japan

<sup>2)</sup> Department of Public Health Nursing, Kobe City College of Nursing, Hyogo, Japan

**Abstract** OBJECTIVE : To clarify how public health nurses perceive the health literacy of mothers with infants regarding childcare.

METHODS : The study participants were five public health nurses with >3 years of experience in maternal and child health care working in two cities and three towns with different regional characteristics in prefecture A. A semi-constructive interview-based survey was conducted from March to April 2018, which included a qualitative inductive analysis of how public health nurses perceive the current state of health literacy regarding childcare. The study purpose was explained verbally and in writing, and the participants signed a consent form. This study was approved by the ethical review committee of the affiliated university.

RESULTS : The public health nurses recognized several key factors in health literacy : (1) mothers having access to familiar sources of child-rearing information ; (2) inadequate understanding of child-rearing information due to poor communication ; (3) mothers selecting child-rearing information based on their own values ; (4) child-rearing manuals taking precedence over the child's situation ; (5) identifying reliable childcare information ; and (6) mothers performing child-rearing at the mercy of excess information.

DISCUSSION : Public health nurses felt the need to educate mothers so that they can make good use of reliable information, including from public health nurses and other professionals. As information technology continues to advance, new infectious diseases (e.g., coronavirus disease) emerge, and online support becomes the mainstay of support. The importance of supporting mothers to increase their health literacy regarding childcare was suggested.

*Key words* : health literacy, public health nurse, mothers, infants, childcare information